

隅田川の河口に架けられ「帝都の門」と称された「永代橋」をつくった田中豊。
横浜港に入港する船が目印とし、船員たちが「キングの塔」と呼んだ「神奈川県庁舎」をつくった佐野利器。
関東大震災で大きな被害を受けた東京、横浜で復興のシンボルをつくり、
人々に希望をもたらした技術者がいた。

偉人伝

the life of a great person

土木
建築

VOL.9

建築

「一八八〇年～一九五六年」

佐野 Toshihika Sano 利器

建築構造学を確立、
「震度」の概念を
導入した



佐野利器は1880(明治13)年、山形県に生まれる。幼少期の佐野は、軍人になることを希望していたが、中学校の物理学教師の話聞くうちに科学技術に興味を持ち始める。1900(明治33)年、東京帝国大学建築学科に入学、辰野金吾の講義を受け耐震構造の研究を決意し、大学卒業後は大学院に残り講師となる。1906(明治39)年に起きたサンフランシスコ地震を視察、剛構造法と鉄筋コンクリート建築を用いた耐震構造の有用性に確信を得る。1911(明治44)年から3年間、研究のため渡独、英・米・伊の大学や工場も歴訪した。帰国後、地震動が建物に及ぼす複雑な作用を「震度」という具体的な概念で論理化した「家屋耐震構造論」を発表。この論文により佐野は建築構造学者として名声を上げた。

関東大震災後、建築構造学の第一人者である佐野は帝都復興院理事、東京市建設局局長を兼任して、東京に100を超える復興小学校や、横浜に神奈川県庁舎などの鉄筋コンクリート造の建築を手掛け、都市の不燃化を推進した。

佐野は今日の日本の建築構造学の基礎をつくりあげ、地震に耐えうる都市づくりに尽力した。

土木

日本の橋梁技術
近代化の立役者

田中 Yutaka Tanaka 豊

Yutaka Tanaka

「一八八八年～一九六四年」



田中豊は1888(明治21)年、長野県に生まれる。1913(大正2)年、東京帝国大学土木工学科を卒業して鉄道院技術部に勤務。1920(大正9)年から2年間、渡英して鉄道工学や鉄道事業の研究を行う。

帰国した翌年の1923(大正12)年に関東大震災が発生。甚大な被害を受けた東京の復興を進めるため、帝都復興院の橋梁課長に抜擢され、田中は橋梁の道を歩み始める。隅田川の橋梁復旧では、独自の橋梁形式、新しい基礎工法を用いて「帝都の門」と称された永代橋など当時最先端の橋梁を設計し、日本の橋梁技術を大きく向上させた。

1925(大正14)年から東京帝国大学で24年間教鞭をとり、後進の指導に尽力した。さらに死去する3年前から、土木学会の連絡橋技術調査委員会・委員長を務め近代橋梁の理論と構造の研究を行った。

田中は、技術者・研究者・教育者として数々の功績を残し、日本の橋梁技術を国際的水準まで高めた。